

北海道工業構成史序説

室 谷 賢 治 郎

工業といふ言葉が、一般の慣用語並びに科學の術語に於て、二つの異つた意味を有することは、ビュヒアールが夙に指摘した通りである。¹⁾即ち、一は歴史的・相對的意味であり、他は經濟的・絶對的意味である。いま前者の考察を工業構成史と名付け、暫く地域を北海道に取材して検討を加へたい。

工業構成史を検討する意圖は、好事家の單なる詮鑿に追隨するのではない。この點、工業構成史は在來の工業史そのまゝであつてはならぬ筈である。寧ろ、工業の在り方を探知し、政策の基盤たらしめるに足るものが、新たな工業構成史検討の課題であらねばならぬ。換言すれば、歴史を通して理論を樹て、政策を生む科學的態度が、構成史の要請となるのである。再び別言すれば、工業立地の理論を確立し、農工商調整の政策に寄與する底の工業構成史の研鑽が待望せられるのである。

「日本工業構成史」及び「日本工業構成論」の著者森喜一氏は、工業構成と工業構造とを本質的に峻別す

る用意を示し、構成は構造の中にあつて、部門的相互關係を中心に勞働力・技術・生産裝備・地域及び資本等の關係を、考察の對象として有つものとせられる。²⁾併し、同氏自ら構成と構造との區別の實際上困難なことを認められる通り、³⁾工業構成と工業構造とは混用せられ、又は混沌たる場合が少くない。卑見を以てすれば、構成と構造とを、しかく嚴密に區別する必要はない。蓋し工業の基底をなす諸條件と國民經濟構造との關聯を繹ぬべき工業構造は、その中に含まれそれに制約せられる工業構成を把握することを、前提とするからである。構造を工業の外部經濟 external economy として考へ、構成を工業の内部經濟 internal economy として捉へることも許されるであらう。工業構成と工業構造とは、かくして實は混用又は混沌の評を避け得られるのみならず、緊密に有機的連繫を保たしめられることになるのである。

然らば、工業構成史はこれを如何様に整序し、叙述すべきか。構成史は何物に照して構成せられ、記録せらるべきか。時の推移に順つて記し進めることは、この場合最も無難に見えるが、併しそれだけでは理論と政策とを建設する上に、力弱い歴史と墮する惧れがある。

ピユヒアーの輩に倣つて、工業の經營形態を注視しつゝ、家内仕事、賃仕事、價格仕事、問屋制度及び工場制度を段階付ける説き方もある。⁴⁾これも併しながら完璧な工業構成史とはなし難い。何となれば經濟發展の段階に照應せしめるピユヒアー流の史觀は、生成の過程を説くには巧妙であつても、抑も發展とは何を豫定してのことであるかを、原理的に究めなければなるまいと思はれるからである。生成變轉すること必ずしも發展で

はあるまい。時としては退歩であることもあるであらう。動植物の生育と老衰との關係に顧みて、この理は覺られる筈である。故に工業が輕工業から重工業へ移行する傾向を目して、工業の發展に於ける速度指標となす立論には、⁵⁾疑義を挿まざるを得なくなる。假りに重工業から輕工業へ向ふことありとして、それは發展と云へぬであらうか。況んや生産の規模により中小工業から大工業へ進むことは、常に發展とは限らぬであらう。

翻つて概説的な参考文献の乏しい「日本工業史」の一二を繙き、その編述を窺ふとき、明治三十年出版に係る横井時冬博士の業績⁶⁾と、昭和十七年發行に成る南種康博教授の勞作⁷⁾との間には、興味を覺えしめられるものがある。横井博士の著では、上古時代、寧樂朝時代、藤原氏時代、武家時代、徳川時代及び維新後の工業を編年別或は縦割式に具さに物語られたのに對し、南種教授の著では傳統工業、近代工業及び新興工業を業種別或は横割式に手際良く盛られてある。因みに滿岡忠成氏の「日本工藝史」に於ては、先史・原史時代、飛鳥・奈良時代、平安時代、鎌倉・室町時代、桃山・江戸時代及び現代の様相を編年別に概観してゐる。南種教授の分類は、通俗的には、昨日までの工業、今日の工業及び今日以後の工業と云ふことになるであらうが、これは工業構成史を整序する上に慥かに役立つ一の指針である。業種別に各工業の起源沿革を叙述して該工業の歴史を把握する方針が、南種教授の勞作に於ては見事に有機的に取扱はれ、而も明かに發展を意識してゐると見られるが故である。上に問題とした發展の輪廓が、茲には映し出されて來たかに見えるのである。

凡そ發展に關しては、苟もその目標が定立せられることを要する。若し重工業を目標とするならば、輕工業

がこれに近づくことは、疑もなく發展であらう。然るに、重工業は更に別の何物かへ向つて、歩みを運ばんとすることがないであらうか。重工業が終局の目標であると、果して斷言し得るであらうか。かく考へるとき、工業に於ける發展は、畢竟するに個人生活の安定並びに國家體制の強固といふ目標を樹て、こそ、始めて論議し得べき性質のものであると云はざるを得ない。

先づ個人生活の安定から云へば、衣食住が基本的に求められる。織維工業、食料品工業、建築工業の重要性を思はずにゐられない。次に國家體制の強固から云へば、高度の國防乃至戦争が絶対に避けられぬところである。金屬及機械工業、化學工業、瓦斯及電氣工業の緊要を痛感せしめられずゐられない。而も個人と國家との關係は、二にして二にあらざ、一ならずして一である。個人生活の安定を期する前記の如き工業を平和産業と呼び、國家體制の強固を念する再び前記の如き工業を緊急産業と稱し、別個の措置を講じようとする態度は十分に吟味を要する點である。かゝる吟味を加へつゝ、個人と國家との共存共榮に於ける均衡を保たんがためにも、工業構成史の検討は欠くべからざるものとなるのである。

- (1) K. Bücher, Art. Gewerbe, im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Bd. IV. 4. A., Jena 1927.
- (2) 森喜一著「日本工業構成史」一頁參照。
- (3) 同書 二頁參照。
- (4) Kurt Wiedenfeld, Gewerbepolitik. Berlin 1927. S. 3. ff.
- (5) 高橋龜吉著「日本工業發展論」第二編參照。

- 中村靜治著「日本工業論」第一編參照。
 (6) 横井時冬著「日本工業史」
 (7) 南種康博著「日本工業史」

二

さて現實に立返り、北海道に於ける工業構成史を追尋するとき、第一に需められるものは、工業生産が全産業に於て有つところの比重であらう。これによつて北海道の工業化の程度を察知し、産業の近代化の水準を測定することが可能となるのである。左に生産額の變化趨勢を示さう。

年次	農産	畜産	水産	林産	工業	鑛産	合計
明治二十九年	五、〇四九 (千円)	一〇〇 (千円)	一一、三四一 (千円)	二二七 (千円)	二、七四三 (千円)	二、六一三 (千円)	二二、九六六 (千円)
三十四年	一三、四五二	一九八	一二、五七五	一、〇一八	六、二八二	六、六三五	四〇、一六二
三十九年	二四、〇二〇	八七五	一〇、三七四	五、四四一	一一、八一九	七、九一八	六〇、四五〇
四十四年	四二、二六四	一、三六七	二七、一三七	一〇、九四九	一八、八〇八	八、二四九	一〇八、六七六
大正元年	五三、四三八	一、四八一	三〇、七七二	一〇、九二五	二三、七六一	九、六七二	一三九、〇七一
三年	五〇、六二三	一、五七七	三六、八九四	一二、二〇八	二八、七三五	一一、六三三	一四二、六六三

年	五	三	六	九	十二
昭和	三	六	九	十二	
年	年	年	年	年	年
七四四二九	一五七四四六	五九八五一	一二五七四三	二二八二五四	
二、五〇一	一五、二四〇	一〇、六〇一	一三、七八一	二一、五三五	
四六、〇六四	九九、五七五	六九、三四六	一〇六、九八二	一四一、七五七	
一五六四一	二七、七一三	一四、七四七	三一、四五七	四九、七九七	
四七、一五四	一七〇、二五六	一三〇、〇五一	一九九、三八三	三二四、六四〇	
一一七八四	五六、一六一	三七、〇五三	六七、四一一	一二三、八六七	
一九七、五七五	五二六、三九五	三二一、五五一	五四四、七六〇	八七八、八四二	

即ち、明治年間には北海道に於ける工産價額は農産價額の半ばにも達せず、大正年間に入つても尙ほ且つ前者は後者に及ばざること遠かつたのに、昭和三年には漸く兩者の地位入れ更り、この情勢はその後年を逐ふに伴れ懸隔を示し、遂に支那事變勃發の年たる昭和十二年には工産は農産を約四〇%凌駕するに至つた。而して昭和十七年現在に於て工産が鑛産を含め、總生産價額の六〇%を占めることとなつた事實は、張目に値するものでなければならぬ。北海道の工業化、別言すれば産業構造に於ける工業比率の農業比率に對する優位化は既に蔽ひ難し。

これを日本全國の工業化の程度と比較すると、昭和十四年現在全國での工業對農産の比率は七九・六%對二〇・四%となつてゐるから、北海道の工業化の程度は左程高いものと云ふことは出來ない。因みに工産の農産に對する優位の比率をアメリカに就て見れば、一九三一年（昭和六年）に八三・四%であり、ドイツに就て見れ

ば、一九三二年（昭和七年）に八〇・三%であり¹⁰⁾ソ聯に就て見れば、一九三七年（昭和十二年）に八二・六%である。世界に於ける諸國の産業水準が、著しく近接しつつある現勢を覺ると共に、北海道産業の進路の啓開が期せられるのである。

右の如く工産が總生産に於て有する比重、特に農産に對する優位化を知ることとは、曩に記した工業の外部經濟に觸れるものである。これに併行して産業世帯の状態を眺めるとき、工業の外部經濟は愈々明かにせられる。仍て北海道に於ける産業世帯を見渡すと次の通りである。¹²⁾

農業	水産業	鑛業	工業	商業	交通業	公務自由業	家庭使用人	其の他の有業者	無業	計
一六〇、五三七	四八、二八九	五五、一八四	九〇、三八三	六七、五二七	四六、五二七	五九、〇五四	一、三七九	五三、一六九	一九、九三四	六〇〇、九五三

これによつて總世帯に於て農業世帯が首位を占め二六・六%に當り、工業世帯が次位を取り一五・〇%を示すことが知られる。即ち農業世帯の人口が工業世帯の人口へ移る餘地あるものとして、これは注目されなければならぬ數字である。

- (8) 明治・大正年間は中外産業調査會編纂、開道五十年紀念出版「北海道産業發達史」前編に從ひ、昭和年間には北海道廳編「北海道概況」に據る。
- (9) 森喜一著「日本工業構成史」八頁。

(10) 鹽谷九十九著「アメリカ經濟の發展」一四六頁。

東亞研究所譯「ソヴィエト聯邦と資本主義諸國」四二頁。

(II) 滿鐵調查部編「世界經濟の現勢」二八六頁。

(12) 北海道廳調査に基く。

三

北海道に於ける工業構成史の探求に當り、第二に望まれるものは、業種別工業の内譯でなければならぬ。素と北海道は地域廣大で四面環海の自然條件により、夙に農産、水産を主とし、工産は従たる地位に置かれた。開拓使廳が明治十九年民間に工場を拂下げた札幌麥酒醸造所の如きも、夏季原料たる大麥を栽培せしめ、冬季醸造に當らしめるところの半農半工又は農主工従の經營であつた。製粉、機織、製網、製糖、魚介罐詰等何れもその例外をなすものでなかつた。この概勢は左表に於て見られる如く、明治年間を通じて殆ど變化なく、大正年間に入つて急激に大規模となり、近代化して來たものである。

年	種別	
	次	別
明治二十五年	織維工業	六・五%
	機械工業	一%
三十二年	窯工業	八・四%
	化學工業	一%
明治二十五年	木工業	八・三%
	食品工業	五・一%
三十二年	其他	七一・七%
	合計	一〇〇・〇%

年次	種別	
	昭和二年	昭和三年
七年	二四・七	二四・六
六年	二六・〇	二四・六
五年	二四・六	二四・六
四年	二四・六	二四・六
三年	二四・六	二四・六
昭和二年	二三・七	二四・六
紙	二三・七	二四・六
パルプ	一〇・一	九・四
諸機械	一三・七	一三・五
醸造物	一六・四	一六・六
セメント	七・三	六・〇
トメ	四・四	四・二
砂糖	六・五	八・〇
澱粉	三・五	三・八
麥酒	二・三	二・七
製麻	二・二	二・三
金屬精料及材	一・八	二・六
木製品	八・二	八・六
薄荷	四・〇	二・四
合計	一〇〇	一〇〇

これを別して、重要工業に就て調べると次の表が得られる。¹⁵⁾

年次	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年
紙	五・二	四・五	四・四	三・五	四・〇	四・六	四・三
パルプ	一〇・七	一四・〇	一七・五	二〇・二	一九・四	二四・九	二〇・九
諸機械	三・三	三・〇	三・一	三・〇	二・五	二・二	二・〇
醸造物	三三・四	二六・八	二四・一	二二・三	二七・六	二二・二	一九・七
セメント	六・三	五・六	五・五	三・九	三・八	三・九	七・四
トメ	三〇・五	三六・二	三五・二	三六・四	三五・二	三五・一	三七・八
砂糖	一〇・五	九・九	一〇・一	一〇・四	七・四	七・〇	七・八
澱粉	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

十三年	十二年	十一年	十年	九年	八年
一九・四	二一・四	三〇・六	二三・三	二六・六	二七・〇
六・四	〇・三	〇・一	〇・一	〇・二	〇・二
二四・五	二九・七	二〇・二	二三・五	二二・四	一九・二
一二・六	一二・一	一二・七	一五・六	一五・二	一六・六
二・四	三・〇	三・四	四・〇	四・八	四・二
六・七	七・五	八・一	八・三	六・三	八・〇
八・四	七・五	五・一	五・五	四・五	五・一
二・二	一・九	二・二	二・二	二・四	二・三
三・八	三・〇	二・四	一・七	一・七	二・〇
六・二	五・五	六・五	八・一	七・三	四・〇
三・七	四・七	五・一	五・一	六・七	七・五
三・一	三・七	三・七	二・八	三・二	四・〇
一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇	一・〇

備考 (イ) 砂糖は、粗糖、精製糖、糖蜜をいふ。

(ロ) パルプ生産額の昭和六年の激減は二工場閉鎖に由るもので、八年以降の激減は製紙工場に於て大部分自家用となつたためである。十二年以降の激増は増産計畫に基く。

(ハ) 金属精鍊及材料品は、製鐵のみを示す。

進んで工場數及び職工數を眺め、工業の内部經濟を打診せば如何といふに、左表はその解明を與へる資料である。¹⁶⁾

年次	工場數	職工數
明治十九年	一一	一〇一
二十四年	六一	二、三四四
二十九年	九〇	五、三七四

北海道工業構成史序説 (室谷)

三十四年	九六	五、二八一
三十九年	二五八	九、二九一
大正三年	五四四	三二、六二五
七年	二、九七二	五一、四八五
十一年	三、三〇一	三四、五四五
十五年	一、三〇三	二一、一七八
昭和四年	一、七八三	三〇、三八五
七年	一、八五九	二八、一九八
十年	二、四三五	四二、五八六
十一年	二、六九五	四六、七二七
十二年	三、九〇二	四九、三六三
十三年	四、〇三一	五三、一九三

以上を以て北海道工業構成史の序説を終へ、次稿より逐次各業種別工業の起源、動向を繹ね、本論に入らうと思ふ。

- (13) 北海道廳編纂「北海道史」第四卷・六六二頁表。
 (14) 北海道廳編「北海道概況」の價格調より算出。
 (15) 同上算出。
 (16) 明治・大正年間は「北海道史」、昭和年間は「北海道概況」に據る。

附記

本稿の統計的數字は始め最近までの分を印刷して貰つたが、檢閲當局の注意により昭和十四年以後を削除するの
已むなきに至つた。骨抜きで甚だ不本意ではあるけれども、いまとなつては致し方ない。讀者の寛容を乞ふ
次第である。

(再校の日)